

A House of Luxury

長期持続 (Longue Durée) を生き続ける建築

建築史系スタジオ課題

本スタジオ « A House of Luxury » がターゲットにするのは「家」である。20世紀日本の建築理論は、小さいけれど豊かな住空間（最小限住宅）を理想としてきた。慎ましくシンプルでありながら、機能的かつ強度ある空間。これが20世紀の理想だったように思われる。

だが21世紀になって、世の中には空き家が溢れている。こうした時代に新築を設計するチャンスに恵まれたならば、30年で空き家になってしまうような住宅ではなく、もっとずっと長期の時間軸のなかで使い続けられるクオリティを持つ建築を設計して欲しいと思う。ここではそれを「豪邸のクオリティ」と呼んでみよう。

豪邸を設計するための建築理論は、20世紀には存在しなかった。それは、ただ広ければいいというものではない。20LDKの住宅など、むろんナンセンスである。たとえ小さくとも、豪邸のクオリティを有し、長く愛される建築をつくることは可能だろうか？

本スタジオでは、この点を物質文化 (Material Culture) の観点から追求したい。それは「コトづくり」ではなく、徹底的な「モノづくり」の視点から建築を考えるということである。

一方で、都市住宅の社会性の側面についても考えて欲しいと考えている。そのため本スタジオではさまざまなバリエーションの家族を用意している。各自が「担当する」家族が、都市のどのような場所で、どのような建築空間のなかで生活するのか、スタジオ内で議論を重ねながら、それぞれに設計してほしい。

スタジオのテーマ

- ▶ 建築の物質性
 - Luxury空間のarchetypeをデザイン
 - その空間を使って設計する
- ▶ 住宅の社会性
 - 現代の社会問題
 - 格差・多様性・高齢化 etc

スタジオ初回ガイダンス*

4月11日 (木) 14:00から、多目的演習室

エスキス

スケジュールは、スタジオ内で提示します

履修条件

学部生のみ (最大10名程度)

指導メンバー

加藤耕一 + 橋本吉史・谷繁玲央 (TA)

特別レクチャー

建築家・小川晋一氏による特別講義

4/23 (火) 15:00-16:30

※4月11日までの宿題

右のGoogle Driveにアクセスの上、サンプルを参考に「Luxury」を示す画像を10枚集め、フォーマットにレイアウトして印刷して持参すること



ナルボンヌ大司教の館